



根岸 親

つながる子どもたちの増加、そして、それに伴って起きている地域のさまざまな変容が見られます。そうした環境に置かれている子どもたちに対して、これまでは主に学校が中心になって支援をしてきましたが、学校だけの支援では限界があるのではないか、地域の活動と学校との連携も不足しているのではないかという課題も見えてきています。

協働実践研究の別の班を担当している野山広さんからお聞きしたのですが、文化審議会国語分科会の日本語教育小委員会の中でも、地域の日本語教室にたくさんの年少者の子どもが来ていて、その教室が学校と連携を取ろうとするが、なかなかうまくいかない、ぜひ学校関係者にもそういった状況を理解し、協力をいただきたいという話も出ているとのことでした。国の協議会などでもこうしたことが話題になっているという実情があるわけです。

地域の支援者、団体と学校、行政その他関係機関とがどう連携するかが求められている中で、学校教育中心からの転換、地域の活動を中核にしたサポートを考えることができないかということで、当班は、抽象的な議論ではなく、具体的な地域をモデルにした協働実践研究を進めてきました。

対象区として主に川崎市川崎区をフィールドに、外国につながる子どもたち、その保護者のことも視野に入れ、学習サポートなどさまざまなことをやりながら、高校、子どもたちが行っている小中学校、川崎市総合教育センターなどの機関、さらには子どもたちを支援するOB、OGなどにもかかわってもらいながら、活動する多様な担い手による協働実践モデルの構築を目指しています。

また、川崎市川崎区だけではなく、今日の第2部のパネルディスカッションに登場いただく愛知県豊田市保見地区や福岡市立香椎浜小学校親子日本語教室「よるとも会」など、他地域の実践や視点から学びながら、抽象的な議論ではなく、具体的な地域をモデルにして、地域から外国につながる子どもの教育を支援する取り組みの構築につながる協働実践研究を進めていきたいと思えます。以上です。

■ プレフォーラム「川崎市ふれあい館」でのワークショップ

佐藤公孝 川崎市総合教育センターカリキュラムセンター指導主事の佐藤公孝と申します。「川崎市ふれあい館」で行われたプレフォーラムについて報告します。

プレフォーラムは「楽・ふれあい・トーク」——目の前の外国につながる子どもたちに、わたしたちができることを——というタイトルで開かれ、学校、ボランティアなどの関係者約70人が参加し、主にワークショップを行いました。ファシリテーターの私が目指したことは4点ほどありました。

- ①具体的に課題や悩みを素直に語り合う。その中で当然、課題はあるけれども、具体的に解決方法が見つからないかという、そんな話し合いをしたい、ということです。
- ②一方通行の研修にしない。一方的に話すだけではなくて、お互いに本音をチョットでもいいんです、「助けて」と周りの人に言うと違ってくるのではないかと、言葉に出すことをためらっている人たちを、何とか救い出せないかというねらいがあります。
- ③「人間には多様性があり、だからこそ会話が必要なのである。同時に、多様性こそが対話を支えるものである」。前国連事務総長のコフィー・アナンさんの言葉です。大いに語り合おうということです。
- ④笑顔と笑いが大切。外国につながる子どもたちの教育を話し合うと、重い話に陥ってしまい、抽象的な話で解決策が見いだせないことを私はよく経験しています。そこを「楽・ふれあい・トーク」という枠で、何か改善できないかということ。

次に、ワークショップの大きな流れをご紹介します。

まず、個人の考えを書き出していただきました。それから、それぞれの立場からの提案。自分とその人との比較。さらにグループに分かれて、ひとつの課題から具体的な解決方法を考えてもらい、短時間で発表していただきました。そして最後に外国につながる方にお話をさせていただきました。

ワークショップの細かい内容を説明する時間はありませんが、具体的な提案ということで、参加者のボランティアからいろんなことが出てきました。

- *とにかく共有する場がない。そこを何とかしたい。
- *ボランティアのために学校に入る許可証をそろえてほしい。学校の教員からすると許可証は常にあるものですが、ボランティアの立場からすると、3年、4年行っているけれども変わらないじゃないか。そこを何とかしてほしいという提案です。
- *外国のカリキュラム、教育制度を調べ、冊子にまとめ、それを基に研修してほしい。実際にそういう冊子はあるのですが、現場には届いていません。

- * 定期的な家庭訪問ができないかというようなことも出ていました。
- * 交流の場をつくる、情報交換。これがこれからの課題になるとは思いますが、いかに継続して、どういうものを蓄積していくかということです。
- * 親子で学べる日本語教育の推進という提案もありました。これは今日の後の話にもつながると思いますが、日本語教室を柔軟な形で運営できれば、可能ではないかと私自身は思っています。
- * 中学校の教員が多いグループでは、学力、進路の話で侃々諤々（かんかんがくがく）でした。だんだん具体性はなくなるのですが、面白い議論をしていました。
- * 外国籍の児童をみんなで一緒に見ようというグループも出てきました。その中で、学校は課題や保護者を見ていないのではないかという意見が出たわけですが、最終的に参加した教員からこういう意見が出てきたので、会場はすごく笑いがあふれて、いい感じで話し合いが進んでいたのではないかと思います。



佐藤公孝

今回のセッションの意味を自分なりに考えてみました。「ふれあい館」で行ったということがすごく大きいと考えています。学校の外での開催、どこにも重心がないことの意味を今回、私自身は感じました。学校を見直す機会になったのではないかということです。少し悩み、思いを語れた、対等に語れたという感覚を参加者に持てただけのように思います。

感想を少し紹介したいと思います。若い女の先生でした。「昨日、突然出張、と言われ参加した者です。国際理解教育についてはかなり勉強不足で、今日はとても新鮮な気持ちでいろいろな立場の方の話を聞くことができました。国籍が違う、言語が違うと言いつつ、やはり心が大切だなと思いました。温かい気持ちで接すると、そこからいろいろなネットワークになっていくと感じました。実際に学校、国際教育、日本語指導等協力者、行政などとの差が明確に体感できた」

この差というところが私にとっては次の課題だと考えています。こんなのもありました。私はすごく気に入っています。

「川崎は外国人教育について進歩的といわれている。話をしてみたら、やや幻想的だった。頭が硬いというか、学校文化を不動のものと考える総花的な発想が予想以上に強かった。よい勉強になった」

この感想は、川崎市以外から参加した方ですが、このグループにいた川崎市内の教員と先週お会いしました。すごく気にされていました。私は「郷に入れば、郷に従えなのよね」と。そこがチャンスではないかと思います。

最後に話していただいたフィリピンにつながる大学生ですが、中学時代に自分の母親がフィリピン人だということを友達に言う機会がなかった。自分の立場を話すのが少し遅かったかもしれないというようなことを話されていました。でも「そういう必要もなかった」という彼が言った言葉に、やはり話を聞いたみんなは感じるものがあつたと思います。

それから、川崎市は全市に多国籍の外国人市民が分散して生活していますが、その中でも、川崎区に集住している傾向があります。改めて地域の核というのは何だろうと考えるきっかけになったのではないかと思います。それが川崎区なのか、「ふれあい館」を中心にするのか、ある小中学校を中心にするのか。それをもう一度、考えるきっかけになったと思います。

最後になりますが、思わぬつながりを価値づけるということを私自身感じました。「楽・ふれあい・トーク」の後の1カ月間にこうしたことに関連したいくつかのことが行われたことです。

まずひとつ目は、日本語を母語としない中学生のための説明会がありました。川崎区の教育文化会館というところで実施したのですが、70人もの保護者や1年生から3年生の生徒が集まりました。ちなみに06年、隣の区でやりましたが、わずか10人でした。「楽・ふれあい・トーク」で参加を呼びかけたり、識字学級などでも広報をしていただいたりしました。当日は、ボランティアの方が生徒を連れてきてくださったというようなケースもありました。これは何かを意味するのではないかと考えています。

それから、川崎には外国人代表者会議やいろいろな会議がありますが、そのひとつである麻生区の市民パートナーシップでは、外国につながる子どもたちを行政とタイアップして学習支援をしようと話し合いを進め、08年4月からスタートすることになりました。川崎区と麻生区という距離的に離れた地域で、学習支援という点での思わぬつながりに価値づけをしていって、方向性を出すということが川崎市でこれから考えていかなければいけないのではないかと思います。そのためには強力なコーディネーター力、何をつなげ、何を実行していくのか、そして、どちらに向かっていくのかというあたりをこれから考えていきたいと思えます。